

小篆の部品図形の不統一性から見る字書資料の参照関係

鈴木俊哉[†]

概要: 大徐本説文解字は北宋初期に成立したが、現存する宋本説文解字は避諱の状況から南宋の孝宗期の刊本と考えられてきた。一方、南宋で成立した説文解字五音韻譜は、20世紀中にはほぼ明刊本しか得られなかったこともあり、研究対象として用いる場合は基本的には宋本説文解字より後代の資料と位置付けられてきた。今世紀に入り、ほぼ完本の宋本五音韻譜の影印が出版された。これも避諱の状況から孝宗期の刊本と考えられる。すると、現存の宋本説文解字と宋本五音韻譜の前後関係あるいは参照関係に興味を持たれる。これを考える材料として、同一のデザインとなる筈の部品図形を持つ小篆字形を集めるためのツールを作成し、得られた部品図形のばらつき予備的な調査を行い、この2者の関係を議論することを試みた。

キーワード: 小篆、説文解字、五音韻譜

Non-Uniform Variety of Seal Glyph Shapes and the Supposed Relationship of Seal Dictionaries in the Song-Yuan Period

suzuki toshiya[†]

Abstract: The DaXu version of Shuowen Jiezi (SW) was completed in the early period of Northern Song dynasty, but the earliest editions available today have been supposed to be printed in the Southern Song dynasty, and some pages were repaired in the Yuan dynasty. On the other hand, Shuowen Jiezi Wuyin Yunpu (WYYP) was completed in the Southern Song dynasty, but all popular editions are printed in the Ming dynasty. Therefore, usually WYYP had been dealt as the later text than SW itself. In this century, almost complete edition of WYYP printed in the Southern Song dynasty was found and its facsimile version was published. Thus, a question can arise “currently available SW is printed before the earliest WYYP?”. To discuss about this question, a tool to collect the Seal glyph images sharing same glyphic components, by IDS data used by ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 IRG. The inconsistent glyphic variations of SW and WYYP are compared, and it was found that the WYYP might have been based on the SW printed in the Southern Song dynasty, and it might be earlier and more consistent than one of the earliest currently available SW previously owned by Haiyuange.

Keywords: Small Seal, Shuowen Jiezi, Wuyin Yunpu.

1. はじめに

西暦100年ごろに後漢の許慎が編んだ『説文解字』(以下、説文)は、現在の多くの字書が採用している部首分類の原型を定めたものと考えられ、また、秦代に李斯が定めた小篆に関して最も多くの情報を残す文献でもあるので、漢字史研究の中で非常に重要な意味を持つ。

唐代の説文とされる断片はごく一部残ってはいるが、説文の全体を知ることができる資料は五代末・北宋初期に校訂されたいわゆる小徐本・大徐本まで下る。特に大徐本は北宋の太祖の勅命によって校訂されたものであり、大廣益會玉篇(以下、宋本玉篇)、廣韻、集韻、類篇などの楷書の字書にも大きな影響を与えた。

2. 大徐本説文解字と説文解字五音韻譜

2.1. 宋刊大徐本と汲古閣本: 小字本と大字本

この大徐本も、現在知られる版本のうち最も古いとされるのは宋刊小字本と呼ばれる南宋刊元修本の一群である¹。清代の交渉学者の多くは、これを印刷の質も低く、誤りや

脱落を含む坊本と考え、むしろ清代に出版された汲古閣説文解字がより良いテキストとして扱った。この状況は段玉裁が『汲古閣説文解字』を表して、通行の汲古閣説文解字(剗改本、後印本などと呼ばれる)に小徐本による改変があると指摘するまで続いた。汲古閣通行本は北宋小字本を大字本形式で彫りなおしたものと毛扆が記すが、段玉裁が汲古閣未改本(初印本とも呼ばれる)はより大徐本に近いとしたため、未改本の底本は小字本ではなく、大字本形式の明・趙靈均写本であり、より良い宋本に基づくものであったと考える立場も生まれた²。

その後、高橋1995は趙靈均写本の残本、淮南書局翻刻の未改本、汲古閣通行本を詳細に比較し、未改本と通行本で底本の切り替えは発生していないことを指摘した。後に董2020は実際の初印本と趙靈均写本を調査し、汲古閣本の骨格は趙靈均写本であることを明らかにした。

2.2. 宋刊大徐本と五音韻譜

現在我々が見ることができる宋刊小字本は、版木が漫漶している葉での標題は許慎の「慎」を避けていることから、南宋孝宗期のものと考えられている³。そのため、もし北宋

¹ 前世紀は陸心源旧蔵・靜嘉堂文庫現蔵の、いわゆる「岩崎本」の影印がほぼ唯一の公刊された宋刊小字本であった。出版当初は北宋本と銘打たれていた。現在では海源閣旧蔵の宋刊小字本の影印も北京國家圖書館出版社より公刊されている。その他の宋刊小字本との関係については董2019が詳細

に整理し、海源閣本はより早い時期の印刷としている。

² 汲古閣本の底本が未改本と剗改本で異なるという解釈が広まっていたこと、その経緯については高橋1995に詳述されている。

³ 避諱への対応は各巻冒頭の「漢大尉祭酒許慎記」の「慎」を「氏」とした

本から写された影宋写本があったとすれば、現在知られる宋刊小字本よりも、より大徐本原本に近いと期待される。

前世紀においては、趙靈均写本の底本として大字本様式の版本が存在した可能性がしばしば言及されていたが、今世紀に入り、白石 2017、董婧宸 2019、王輝 2020 によって汲古閣未改本、宋刊小字本、また五音韻譜の詳細な比較が行われた。その結果、趙靈均写本は明刊本の五音韻譜に基づいていることが判った。さらに、趙靈均の父である趙宦光旧蔵の宋刊小字本(残本)が残ることから、趙宦光・趙靈均はこれを用いて五音韻譜を並べなおすことが可能であったことも指摘された。

さて、五音韻譜は明代に広く用いられたが、清代に汲古閣説文解字が出版されたことで資料としての評価は著しく下がった。白石 2016 が指摘するまでこの評価が継続していたと言える。しかし、五音韻譜もその成立が南宋孝宗期であることを考えると、現存の宋刊小字本のテキストが五音韻譜の元になった大徐本より古いとは単純には断定できない⁴。前世紀には五音韻譜の宋刊本は全 12 巻のうち巻 12 しか知られていなかった(高橋 2002)、このような議論は材料が乏しく、実質的に不可能であった。しかし、今世紀に入りほぼ完本の天禄琳琅旧蔵本が得られ、その影印出版も行われた。この宋刊五音韻譜には李燾による序文が無く⁵、また標題に「重刊」とあることから、虞仲房による初印本ではない。しかしそれでも議論の材料が得られたことは大きな進展である。

2.3. 清・嘉慶年間以降の説文学と五音韻譜

さて、段玉裁が通行の汲古閣説文解字は大徐本を改めていることを指摘した後、嘉慶年間から宋刊小字本の翻刻がいくつか行われた。そのうち最も広まったものが孫星衍の平津館叢書に含まれる翻刻本(いわゆる平津館本)であり、検索の便を図ってこのレイアウトを改めた陳昌治本が現在もっとも広く参照されている説文である。一方、平津館本と同じ宋刊小字本から翻刻された藤花樹本は、『汲古閣説文訂』を参考に汲古閣本と宋刊小字本をマージしたようなものになっている。両者に違いがある場合は、藤花樹本は汲古閣剞改本に従っている場合が多いが、その汲古閣本の字形は小徐本から剞改本に取り込まれたものではなく、宋本五音韻譜に遡れる場合も少なくない(鈴木・塚田 2020, 2021)。これは五音韻譜が小篆を修正していたと解釈するのが伝統的な立場となるだろうが、宋刊小字本と宋刊五音韻譜のどちらが古いかかわらないと考えると、宋刊小字本が後の補修の際に誤ったという可能性も出てくる。

以上の背景から、宋刊小字本と宋刊五音韻譜の参照関係を考えてみたい。

3. 本稿の問題設定と調査手法

本稿では五音韻譜の底本となった大徐本と、現存の宋刊小字本の関係について考える材料として、宋刊小字本と五音韻譜の小篆の字形差、つまり、説文学上は同一のデザインであるべきものにばらつきがある場合、そのばらつきが

り、欠筆したり、あるいは空格とする(後人が補写している場合がある)など、一定していない。続古逸叢書や四部叢刊の岩崎本影印は加筆があり、後人が空格に補写したものを欠筆させる(たとえば巻 01 上冒頭)など、誤解を招きやすいものになっているので注意されたい。

⁴ 高橋 2002、白石 2017 が述べるように、韻書排列とする前の李燾『五音譜』の段階で既に集韻によって反切は改められていたという。

⁵ 他文献に引かれる序文については高橋 2002、白石 2017 を参照。

両本に共通しているかを予備的に調査する。

3.1. 同一本内の小篆の字形差と収集方法

説文小篆は意符によって漢字を分類しているの、同じ意符を持つとされた小篆は近傍に配置され(これは部首と部首内配列をそれぞれ独立に韻書配列にした五音韻譜でお同様である)、強い意識が無くともその意符の形状は似たものになると期待される。しかし、その図形部品が声符として用いられる場合は離れた箇所配置されるので、必ずしも一貫した形状が保たれない可能性がある。特に、小徐本・大徐本はそれ以前に通行していた李陽冰刊訂説文の小篆を李陽冰以前の字形に戻すという指向があったため(福田 2003)、当時の篆書に習熟している者が自然に書けば大徐本と合致するとは限らない。

これまで筆者は、説文の諸版本を画像分解して得た小篆をそれぞれの版本の配列の順序の表形式で示すデータベースを作成してきたが、この表形式のデータベースでは同じ一覧性に限界があり、声符の図形形状の揺れの調査は困難である。そこで、まず小篆を ISO/IEC 10646 で符号化済みの現代漢字に対応づけ、さらにその現代漢字を ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG が漢字統合の作業に用いる IDS データによって部品検索するツールを作成し、意符・声符を問わず、「統一した形状となる筈の図形部品を含む小篆の一覧」を得られるようにした。著作権的に一般公開できない画像も使用できるよう、サーバ側には静的なデータを置くだけとし、IDS データのパスや部品検索は全てブラウザ内で行うようにしている。



図 1: 試作した小篆検索ツール

ばらつきの確認が容易となるよう、現代漢字で小篆を絞り込んだ後、再検索なしに小篆を採集した版本を変更できるようにした。

<https://gl.github.com/mpsuzuki/parseIDS.html/raw/webworker/testWorker.html>

3.2. 調査対象とする字形差

ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 では説文小篆の文字符号化が議論されてはいるが、まだ統合基準の議論が無く、どのように字形差の有無を判断するかが問題となる。本稿は汲古閣未改本・剞改本の字形差、『復古編』⁶の附録「筆迹小異」「上正下譌」を参考に判断した⁷。「筆迹小異」は違いがある 2 つの字形がどちらも正しいとするもの、「上正下譌」は正しい字形を先に示し、誤った字形を後に示すものである。

4. 調査結果

4.1. 字形差の分布が完全に対応する例

例えば、高・富・復・兩については、大徐本字形は「く

⁶ 『復古編』は北宋の張有が王安石の新法運動後に説文に基づいた文字学を復旧するために編んだ韻書排列の小規模な字書だが、附録では誤りとする字形も示すため、一種の字様書として用いることができる。詳細は邱 2006、王 2020、鈴木 2021 などを参照されたい。

⁷ 董氏からは「復」「出」の不均一についてご教示頂いた。董氏自身も五音韻譜の書誌学的分析に関して論文投稿中とのことである。

ち高」(A型)のように作るが、陳2019が整理するように石刻資料では「はしご高」(B型)のように作るものも少なくない⁸。



図1: 高・復・高の字形差、A型とB型

高・高は「上正下訛」より、復は「筆迹小異」より採集。大徐本の単体字はA型であり、復古編は高・高についてはA型が正しいとする。

海源閣本における「復」の状況を調べると(図2)、大半はA型だが、復・復・復でだけB型である⁹。宋本五音韻譜も両者の字形が混じるが(図3)、B型で作る箇所は海源閣本と同じなのである。さらに厳密に言えば、単体字の「復」は「一」に作るのに対し、それ以外は全て「一」にしていることも両本で共通である。



図2: 海源閣本において「復」を含む小篆一覧



図3: 宋刊五音韻譜において「復」を含む小篆一覧

「眞」も同様の例である。大徐本においては「目し一」のように作ることが多い(図4, C型)。大徐本が単体字として「眞」を掲出する場合はそのように作るため、一貫した字形である。しかし、「目し一」のように作る小篆(図4, D型)も石刻資料にはしばしば見られる。この部分は「匕: 變也。从到人。」と注され、「人」を転倒させたものであるから、どちらに作っても説文学的には誤りではない。海源閣本も宋刊五音韻譜でも「眞」を含む27字のうち、5字だけが例外的にそのようになっている(図5, 6。緑矢印については後述)。しかし、この字形差は汲古閣本の未改本から剞改本に修改される際に一部変更されており、字形差があると認められるだろう。

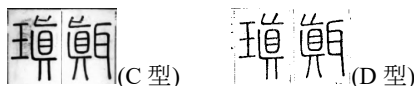


図4: 眞の字形差、C型とD型

C型は汲古閣剞改本、D型は汲古閣未改本から採集。

「眞」単体字を掲出する場合はどちらの版でもC型である。

⁸ 説文の解釈では、高だけは全体を一つの象形とするものの、高・復の上部を高の省略としているので一で作る方がより説解に沿うことになる。ただし省略としているので、「一」とする字形を誤りと断じることは難しい。



図5: 海源閣本において「眞」を含む小篆一覧



図6: 宋刊五音韻譜において「眞」を含む小篆一覧

4.2. 字形差の分布が完全には対応しない例

これらの例では海源閣本と宋刊五音韻譜での字形の揺れが完全に対応しているが、もちろん完全には対応しない場合もある。例えば「長」は、二徐が李陽冰刊訂説文の字形(図7, F型)を採らなかったことを明記している例だが¹⁰、海源閣本では「鬣」の部品としての「長」は例外的に李陽冰の字形になっている(図5、緑矢印)。これに対し、宋刊五音韻譜では通常の「長」である(図6、緑矢印)。「長」を含む小篆は全部で66個あるが、この1字しかF型が見当たらないため、本稿では全てを掲出することはしない。F型が1例しか無いということは、南宋刊小字本の初期の刷では統一されていたものが後に誤ったと見ることもできるが、宋刊五音韻譜が字形の一貫性のために改めたと考えても不自然ではない。



図7: 長の字形差、E型とF型

復古編「筆迹小異」より採集。大徐本の単体字はE型で、F型は李陽冰あるいは李斯の字形とされる。

他の事例を探してみると、「亢」(図8)を含む小篆にもかなりの揺れが見られる。現存の大徐本での単体字は、説解「从大、省頸脈形」を反映してか、楷書のように明確に二

⁹ 「履」はB型ではなく「舟」に従う。

¹⁰ 福田2003、大徐本巻15下の篆文筆迹相承小異、小徐本巻39を参照。

つこの部品から成る字形である(G型)。しかし、秦代簡牘文字や汗簡に見える字形は一体化している(H型)。本稿は実際の出土資料に基づいた文字学的な分析は対象外であるが、金文はH型に近い。『隸辨』はG型を説文、H型を古文とする。海源閣本では19字中11字と半分以上がH型である(図9)。一方、宋刊五音韻譜ではH型は4字に過ぎない(図10)。しかし、宋刊五音韻譜がH型を示す小篆4字は、海源閣本でもH型を示している。

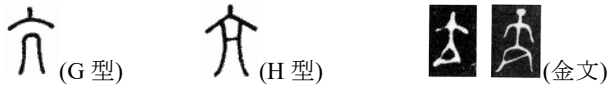


図8: 「亢」の字形差、G型、H型、金文字形

復古編「上正下譌」より採集。復古篇はH型が正しいとする。

金文字形は劉・張 2007 p.66 より採集。

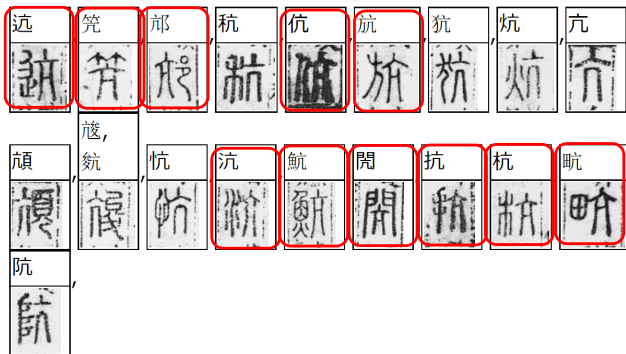


図9 海源閣本において「亢」を含む小篆一覧

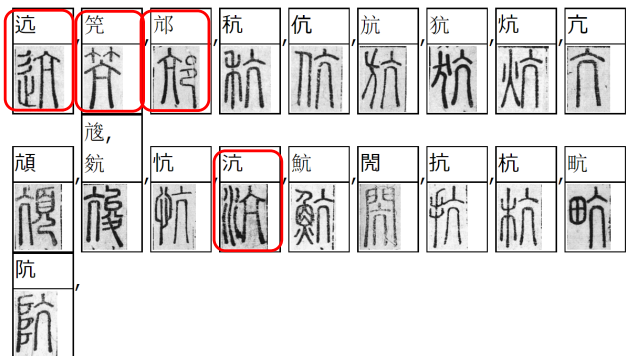


図10: 宋刊五音韻譜において「亢」を含む小篆一覧

「出」にも同様の不整合が見られる。大徐本が単体字として示す場合には上部の「山」に似た字形を口で包むような字形で書くが(図11, I型)、上部の「山」の左画または中央の画を右下に曲げて伸ばした後に左側に戻すという字形(図11, J型)もしばしば見られる。この字形は復古篇で誤りとされる字形であり、当時ある程度通行していたことが窺われる。このJ型の字形は海源閣本では62字中13字で見られるが(図12)、宋刊五音韻譜では6字と半分程度である(図13)。この場合も、宋刊五音韻譜でJ型字形を示す小篆は、全て海源閣本でもJ型で示される。

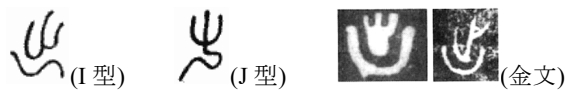


図11: 「出」の字形差、I型とJ型

復古編「上正下譌」より採集。大徐本の単体字はI型である。説文の説明は「艸木益滋上、出達也」で、全体が一つの象形とする。金文(劉・張 2007 p.73)ではI型ではあるが、上部の部品は明らかに足の象形である。



図12: 海源閣本において「出」を含む小篆一覧



図13: 宋刊五音韻譜において「出」を含む小篆一覧

このうち、崇・數・暴の図形部品としての「出」は、大徐本は「从出」と説明するにも関わらずJ型への揺れは無

く、さらに崇・敷については I 型に近いものの、殆ど楷書そのままである。I 型と J 型の揺れは、「出」に均等に起きている訳ではないので、J 型の字形を文字学的に正しいと判断した結果ではなく、美的感覚や書写慣習から混ざったものと思われる。段注本はこれらを I 型に統一している。

5. 小結、今後の課題

既に述べたように、現存の宋刊五音韻譜は重刊本であり、五音韻譜の初印本の様子を忠実に伝える資料とは扱えない。しかし、五音韻譜は初印本の段階で既に配列が大徐本と異なっているから、海源閣本やその祖本であるところの南宋刊小字本から「統一されていない字形差だけ」を採集してそれに合うように修正する動機があったとは考えにくい。本稿の結果から、海源閣本と宋刊五音韻譜には共通の祖本となる南宋刊小字本があり、その小篆は既に一貫性が損なわれていた可能性が考えられる。ただし、本稿の調査は予備的なもので、範囲も限定的である。南宋刊小字本にはもともと海源閣本と同様のばらつきが存在していて、五音韻譜がそれを不完全ながら修正したのか、南宋刊小字本はもともと五音韻譜程度には一貫性があり、海源閣本はそれが崩れた状態なのか判断は難しい。より多くの字形差を調査した上で議論を進めたい。

調査する字形差に関して、本稿では主に復古編の附録から採ったが、そこに示される字形差は宋刊小字本と五音韻譜の比較基準として全てが適切なわけではない。「上正下譌」で問題にされる字形差は大徐本にも五音韻譜にも見えない場合があり、その場合統一されていると言ってよいのかは疑問がある。一方、「筆迹小異」の字形差はそれより小さいが、小字本の図形部品となった場合に彫り分けが難しいと思われるものも少なくない。説文の諸版本に見えるものに絞り込んだ上での評価が必要であろう。

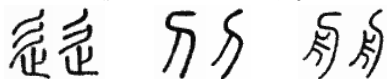


図 14: 復古編「筆迹小異」の字形差の判断が難しい例

おそらく、これは第 2・3 画の接触、刀と舟は上部の曲げの形状を問題にしていると思われる。

また、本稿で調査した宋刊小字本・宋刊五音韻譜はどちらも南宋期なので、北宋期の状況を推測する材料にはならない。北宋期の状況を推測するには、北宋期に既に分岐していたと思われる文献(たとえば説文解字篆韻譜など)が有用かもしれない。

ツール自体の課題としては、ISO/IEC 10646 で符号化済みの現代漢字と IDS を用いた小篆検索は、十分に確認対象を絞り込めない問題がある。例えば、「罒」は現在の楷書では「罒」のように書かれる場合が多いが、「罒」を含む小篆を「罒」で検索しようとすれば蜀・賣などの「罒」ではないものもヒットしてしまう。しかし、「龍」のように説文小篆は「罒」を使っているが、ISO/IEC 10646 の中では「罒+罒能」に対応する現代漢字は符号化されていない場合もある。説文小篆の直接の ISO/IEC 10646 への追加が議論されている現状では、「罒+罒能」に対応する現代漢字を「説文小篆を適切に指示するために必要」という理由付けで提案することは望ましくないであろう。守岡 2021 で提案されているような、説文小篆の構造を説文小篆と IDC の組み合わせで直接に表記する方向が望ましいと思われる。ただし守岡氏の現在の参考実装では小篆を参照するのに実体参照形式を用いており、検索キーの入力の視認性に難があるので、

何等かの工夫が必要である。

謝辞

本研究は科研費課題番号 16K004600A, 19K12716 の成果を含みます。高橋由利子先生、大西克也先生、白石将人先生、董婧宸先生、邱永祺先生、陳信良先生、守岡知彦先生には大変有益な議論を頂きました。深く感謝致します。

参考文献

- 許慎:『宋本説文解字』(海源閣本), 國學基本典籍叢刊, 國家圖書館出版社(北京), ISBN 978-7501360253.
- 李燾:『重刊許氏説文解字五音韻譜』(宋板本), 中國書店(北京), ISBN 978-7-5149-0419-2.
- 王輝 (2020): 「明抄大字本《説文解字》底本考論 - 兼説宋刊《説文》是否有大小字之分」, 文史, 2020 年第 2 輯, 總第 131 輯, p.23 1-244, doi 10.19325/j.cnki.11-1678/k.2020.02.011
- 王珏 (2020): 『北宋張有《復古編》研究』, 中國社會科學出版社, 2020, ISBN 9787520372626
- 白石将人 (2016): 「李燾改定《説文解字五音韻譜》の歴史意義」, 文史新探, 總第 98 期, No.3, p.63-68.
- 白石将人 (2017): 「《説文解字五音韻譜》版本綜述」, 中国經學, 第 20 輯, p.125-137.
- 鈴木俊哉、塚田雅樹 (2020): 「ISO/IEC 10646 に提案された小篆フォントの字形について」, 情処研報(DC), 2020-DC-117 (3), p. 1-8 (2020-07-03), <http://id.nii.ac.jp/1001/00206022/> (2021-07-30 閲覧)
- 鈴木俊哉、塚田雅樹 (2021): 「五音韻譜の小篆字形のデータベース化と ISO/IEC 10646 小篆提案への適用分析」, 情処研報(DC), 2021-DC-120(13), p.1-7 (2021-03-19), <http://id.nii.ac.jp/1001/00210521/> (2021-07-30 閲覧)
- 鈴木俊哉 (2021): 「北宋『復古編』の元代の増補 2 種の文字集合の違いについて」, 情処研報(DC), 2021-DC-121(6), p.1-6 (2021-07-08), <http://id.nii.ac.jp/1001/00211692/> (2021-07-30 閲覧)
- 高橋由利子 (1995): 『説文解字』毛氏汲古閣本について」, 汲古, Vol. 27, p.27-38.
- 高橋由利子 (1997): 「段玉裁の『汲古閣説文訂』について」, 中国文化, Vol. 55, p.37-52, doi 10.15068/00150240
- 高橋由利子 (2002): 「和刻本『説文解字五音韻譜』の依拠した版本について」, 中国文化, Vol. 60, p.11-23, doi 10.15068/00150384
- 陳信良 (2020): 「秦漢簡牘文字の字形変遷の考察」, 大東文化大学博士論文, <http://opac.daito.ac.jp/repo/repository/daito/53026/?opkey=R162780851139516> (2021-08-01 閲覧)
- 邱永祺 (2011): 『張有《復古編》総合研究』, 臺北市立教育大學碩士論文, 2011, <https://hdl.handle.net/11296/538zcm>
- 董婧宸 (2019): 「宋元遞修小字本《説文解字》版本考述——兼考元代西湖書院的兩次版片修補」, 勵耘語言學刊, 2019 年第 1 輯, 總第 30 輯, p.80-105, doi 10.13554/b.cnki.liyunyuan.2019.01.008
- 董婧宸 (2020): 「毛氏汲古閣本《説文解字》版本源流考」, 文史, 2020 年第 3 輯, 總第 132 期, p.187-216, doi 10.19325/j.cnki.11-1678/k.2020.03.008
- 福田哲之 (2003): 「唐写本『説文解字』口部断簡論考」, 書学書道史研究 2003(13), p.43-53, doi 10.11166/shogakushodoshi1991.2003.43
- 守岡知彦 (2021): 「説文小篆に対する漢字構造記述の試み」, 東洋学へのコンピュータ利用第 33 回セミナー, 2021-07-30, 講演概要集 p.17-24, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/seminars/oricom/PDFs/2021-7PDFs/2morioka.pdf> (2021-07-31 閲覧)
- 劉志基、張再興:『中國異體字大系・篆書編』, 上海書画出版社, 2007, ISBN 978-7-80725-637-3